

Title	清~現代
Author(s)	横久保,義洋
Citation	中国研究集刊. 2013, 56, p. 35-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58675
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

[特集]

〔学界時評〕清~現代

横久保義洋

て述べていくが、この時代の思想史研究上の最大の主題 をご覧いただきたい。 汲古書院、二〇〇六年)において近二十年間に重点を置 考察」(奥崎裕司編『明清はいかなる時代であったか』 貴之「明清思想をどう捉えるか 内で書かれた著述について瞥見を試みることとする。 は叙述の便により前期と後期とに大別し主として日本国 が、評者も基本的にその説に賛成である。ただ、ここで に置く主張が次第に賛同を集めるようになってきている い。近年、中国大陸でも中国の近代史の開端を明末清初 いて整理されつつ詳細な紹介がなされているのでそちら 清代思想に対する従来の研究については、かつて伊東 ここでは二○○九年以降に発表された清代から民国 そして現在に至る期間に対する研究を取り扱 本篇ではその後の動向を中心とし ――研究史の素描による いた

> 点から解明を試みている。 は、やはり明学から清学への転換――考証学の成立と展は、やはり明学から清学への転換――考証学の原因と過程とを当時の開、そして衰微、あるいは脱皮の原因と過程とを当時の開、そして衰微、あるいは脱皮の原因と過程とを当時の開、そして衰微、あるいは脱皮の原因と過程とを当時の開、そして衰微、あるいは脱皮の原因と過程とを当時の関、やはり明学から清学への転換――考証学の成立と展

表される明末の経学、とりわけその『儀禮』研究が閻若譜」から成っている。まず、第七章では季本・郝敬に代が、本章の目的上さきに後者の内容から見てみたい。が、本章の目的上さきに後者の内容から見てみたい。が、本章の目的上さきに後者の内容から見てみたい。が、本書は主として版本学の知見を導入して明代における本書は主として版本学の知見を導入して明代における

外なほど多大な影響を与えていることを指摘し、「考拠 ませていたのではないか」とする。 は、その隠された水面下の部分に、 らぬ「妄議」をしていることを挙げ、「漢学の禁欲主義 あるとした上で、恵棟や戴震・段玉裁ですら明末と変わ れつつ、そのことを前提として成り立って」いたもので はなく、「むしろ心学によって内に対する確信を与えら 展開されていた」が、それは心学を斥ける性質のもので する。そして顧氏のこのような特徴は明末の学に共通す る」のも、換言すれば荀子の聖人像に近いのだとも指摘 ける完全、 この外につとめ、 が、それは内面の空洞化につながるものであり、さらに 等の学問には道徳と知識との分離の傾向が見受けられる の学の先駆者」とするのも妥当な評価だとする。 るものでもあると論じ、 漢学に先駆する明末の経学は、確かに事の学によって 彼の聖人像が「内なる道徳的聖人ではなく知識にお 政治的聖人という外的性格を強く帯びてい 内を論じない傾向は顧炎武にも見ら さらに従来の通説とは異なり、 明末的感情を深く潜 また彼

清学の開拓者たちがかつて所属しており、 なったことが指摘されていながらも専論はなされてこな く第八章では、これまで顧炎武・黄宗羲をはじめ、 思想的母体と

学に動揺をもたらした。そこで乾隆年間には祖父の時代

他に例を見ないほど推し進めたがそれはかえって体制教

と、そしてそのあらたな学術を形成しようとする可能性 は明清の鼎革によって一旦は押しとどめられたとする。 その学風が宋学を離れ古注疏への志向を有していたこ くまで政治的実践に主眼を置いていたにもかかわらず、 (溥・顧夢麟そして陳子龍らの復社の主要メンバーがあ った明末の復社についてとりあげている。ここでは、 第九章では、はじめに考証学発生の要因として梁啓超

璩

万斯大のみならず後の胡承珙など清代の考拠家に意

張 か

明末、 が、清初・順治親政期には反抗分子を摘発し、「権力の れる清朝による言論統制の実態を論ずる。前章を受け 以来、しばしば指摘されてきた禁書・文字の獄に象徴さ 復社等により異常なまでに紳権の拡張が見られた

綻し、「 な編纂事業が実施され、「理学名臣」が輩出した。しか ないといった力による体制教学が行われ、その結果明末 雍正帝はふたたび弛み始めた士風を禁圧し、 の治世の晩年には「内聖外王」に根本的な矛盾を生じ破 し程朱による文治政策に呼応する一般士人は少なく、 て康熙朝に入ると、帝自身による正学鼓吹により大規模 の放恣な風気は一掃し、党社運動は根絶された。つづい 意志」を「公」として士大夫の自主性や「横議」を認め 寛政」も徐々に退かざるを得なくなるに至る。 君臣の義を

編纂事業の中心が当時の士大夫を引き付けやすい「経史 証することはもはや難しいことは明らかなため、 保ち続けることとなるが、それのみでは内面 である康熙朝への復帰がはかられ、理学は正統の地位を の統制を保 次第に

の実学」、つまり漢学に移された、とする。

退した後、 残らざるを得なかったと述べ、樸学が変質し、 そなえているが…病的な、きわめて不自然な」形で生き と「六経皆史」説の展開とを『文史通義』の出版史をも して清末の「学会」を復社等の「党社」の復活とみなす。 塞状況下にあっては、「樸学」という「ある種 支えていたのは明末の精神」であったが、このような閉 に明末の党社活動の再現を恐れており、その点で利害は めるはたらきをしていたが、実は朝廷側も士大夫側も共 る風潮は長く続き、また禁書も文字の獄による効果を高 の試みは成功し、当代のことを筆端にのぼせることを憚 うながすことを目的とした「間接的統制」であった。そ 多くの場合政争等の背景はなく、士大夫に一種の自粛を 一致していたのだとする。そして、「漢学を根底において 第十章では長い歴史を有する「六経皆史」という言葉 乾隆年間、たびたび起こされた文字の獄に対しても、 ふたたび「紳権」 その淵源を尋ねた後、 が叫ばれるようになったと 章学誠の後代への影響 朝廷が衰 の魅力を

> ずる。 との問題を、 めつつ襲自珍、 最終的に解決したのは章炳麟であったと論 蔣湘南、張宗泰、 譚献と辿り、 事と義

絡

に清学をつくる準備ができていたことを示唆してい 期の出版と学術」「第三章 出版規制が行われていたことを挙げることにより、 メージとは異なり、明代後期においてすでに相当厳しい き内容なのだが、特に第四・第五章においては従来のイ 術文化の変遷を考察しており、むしろ前章で取り扱うべ の出版統制」「第五章 .版の明末清初」)はもっぱら版本学の観点から明代学 第一部 (「第一章 文化の雅と俗」「第二章 明末の避諱をめぐって」「第六章 明代活版考」「第四章 明代前半 すで

出

土文化に対する記憶の継承の問題を扱っている。また、 でも、『宋元学案』 録」(『中国 世儀と文社」(『中国 探ろうと試みている陳永福「 活動の中心地におりながらもその姿に批判的であ 一二年)がある他、 【儀らの運動を取り上げ、逆の立場から清代への影響を なお、 清学の成立期についての専論としては、 -社会と文化』 補訂者である全氏の原風景である郷 早坂敏廣「場所の記憶/全祖望の記 社会と文化』第二十五号、 第二十五号、二〇一二年 明末江南太倉州の道学者陸 復社 った陸

世

のみをこころの在りかとしているとする脳中心説に再考一集、二〇〇九年)においても従来の方以智が単純に脳が、「『物理小識』の脳と心」(『日本中国学会報』第六十が、「『物理小識』の脳と心」(『日本中国学会報』第六十 清藤正高氏は近年コンピューターによる漢字処理や障碍

を促している。

とを論証しようとしている。これも、井上書との対比で、大学教育学部紀要』第七九集、二〇一一年)では徐々に大学教育学部紀要』第七九集、二〇一一年)では徐々に大学教育学部紀要』第七九集、二〇一一年)では徐々に大学教育学部紀要』第七九集、二〇一一年)では徐々に入学教育学部紀要』第七九集、二〇一一年)では徐々に入学教育学部紀要』第七九集、二〇一一年)では徐々に入学教育学部紀要』第七九集、二〇一年)では徐々に入り、大学教育学部紀要』第七九集、二〇十一年)では徐々に入り、大学教育学部紀要』第七十二年、大学教育学部紀要』第七十二年、大学教育学部紀要』第七十二年、大学教育学部紀要。これも、井上書との対比で、大学教育学部紀要。

にさまざまな定義があたえられ、幾多もの先人によって学」なる概念が自明のものではないことについて、過去我々にとって主たる研究対象である筈のこの「中国哲人間であることはあらかじめ承知しているのだが、

みると興味深い。

ろう。その意味で、岩波書店から出されてい ないが、これが「中国哲学」となるといまだに紛議 過ごしてきたのではないのだろうか。「ドイツ哲学」「英 つの驚きであった。 国哲学者」である中島隆博氏により書かれたことはひと き『ヒューマニティーズ 「humanities」の一冊として「哲学とは何か」を問うべ は、常に問いかけ続けなければならない問題となるであ ても自らの研究対象が「中国哲学」なのか、それとも 学」なのであろうか。またそれ以前に、我々自身にとっ となることを免れ得ない。そもそも「中国哲学」は 米哲学」がそれぞれ哲学の範疇内に入ることを誰も疑わ 説かれてきたにもかかわらず、ともすれば無自覚に打ち 中国哲学史」なのか、あるいは「中国思想史」なの 哲学』(二〇〇九年)が る叢書

力、梁漱溟、それに牟宗三らの思想を挙げつつ哲学の意言る考えはヘーゲル以来、西洋に根強く存在したとし、する考えはヘーゲル以来、西洋に根強く存在したとし、する考えはヘーゲル以来、西洋に根強く存在したとし、する考えはヘーゲル以来、西洋に根強く存在したとし、する考えはヘーゲル以来、西洋に根強く存在したとし、する考えはヘーゲル以来、西洋に根強く存在したとし、する考えはヘーゲル以来、西洋に根強く存在したとし、する考えはヘーゲル以来、西洋に根強く存在したとし、する考えはヘーゲル以来、西洋に根強く存在したとし、する考えは、中国における真の意味での「哲学」を否定可書では、中国における真の意味での「哲学」を否定している。

著者自身の哲学を生きる覚悟を看取することができるの性を生きることである」と述べているのだが、ここから言葉を要約する形で、「中国語において哲学を行うこと義を論ずる。そして、「おわりに」においては楊凱麟の

史料の精読をすることが説かれている。

「思執筆」が参考になろう。ここでは、中島氏とは異京大学出版会、二〇一二年)第七章「思想史」(村田雄京大学出版会、二〇一二年)第七章「思想史」(村田雄京大学出版会、二〇一二年)第七章「思想史」(村田雄京大学出版会、二〇一二年)第七章「思想史」(村田雄宗大門」(東

や胡適らに対する分析が行われている。というタームをめぐる言語・文学理論の観点から章炳麟語論的批評理論』(白澤社、二○○九年)では、「修辞」格少陽『「修辞」という思想――章炳麟と漢字圏の言

○九年)は、互いを理解することを難しくしているもの――小栗栖香頂『念佛圓通』と楊仁山』(法蔵館、二○の間で闘わされた論争を扱った中村薫『日中浄土教論争影響に関する研究も目立った。中でも日中両国の仏教者また、近代仏教については、日中の仏教交流・相互また、近代仏教については、日中の仏教交流・相互

がなされてい

大中国論集』第十五号、二〇一二年)などがある。 一大中国論集』第十五号、二〇一二年)などがある。 では大平浩史「一九二〇年代の仏化青年会と五四新文化では大平浩史「一九二〇年代の仏化青年会と五四新文化させてくれる。その他、五四以降の仏教革新運動についさせてくれる。その他、五四以降の仏教革新運動についとして、両者間に横たわる断層の存在をあらためて認識として、両者間に横たわる断層の存在をあらためて認識

文化』(勉誠出版、二〇〇九年)所収の諸論考等の研究 二〇一三年)、そして堀池編 二〇〇八年)があるが、 紀中国ムスリムの思想的営為』(京都大学学術 中西竜也『中華と対話するイスラーム――一七―一九世 ム哲学の形成 学会報』第六十三集、二〇一一年)、同『中国イスラー ラーム哲学の第二世代―馬注とその思想―」(『日本中国 の自然学― である。すでに明清代の回儒については、佐藤実 国のイスラーム教に対する様々な方面からのアプロ 近年、めざましい勢いで研究が進められているの 中国イスラーム思想研究序説』(汲古 ——王岱輿研究』(人文書院、二〇一二年)、 その後も堀池信夫 『中国のイスラーム思想と 中 国 イス 1 が チ 中

かずかずの批判を受けつつもすでに二十年以上にわたり中国大陸における儒教復活の動きと〈国学熱〉とは、

教的 らず 動向 続い は、 ら逸脱しないものであるばかりか、多様性を承認する自 て儒教が「近代化」の受け皿となったことを評価し 会、二〇一一年)の中では、 うことができるが、 二〇一〇年)所収の講演記録・諸論考にもその一端を窺 次郎編 常に役立つ。なお、 程を中心とした大陸の学界の動静が細述され ら二〇一〇年に至る約三十年間 のである」とする指摘もなされてい 由主義とも相容れぬものであるため、 それ自体の平等思想があくまで「一君万民」の内か この方面を目しているからであって、 てい 体質と社会主義とを類似の型の思想として否定する 「保守系リベラリストの中でも儒教批判者がい 『二十一世紀に儒教を問う』 関西大学出 る。 河田悌一『定点観 版 近年の儒教再評価については土田健 同氏の 部、二〇一一 『儒教入門』(東京大学出版 かつて東アジア諸国におい 測 の儒教再評価 年) . る (早稲田大学出版 社会主義者のみな 中国哲学思 では批 彼らの方は儒 ており、 へと至る過 林批: 想界 るの うつつ 孔 部 非 0

開とについ トルからデリダ、 一〇一一年)に網羅的な紹介がなされているのも特筆す 年 \dot{O} 中 ては、 国 大陸 王前 シュミット、 K おける現代 『中国が 読 ロールズまで』 西洋思想の導入とその展 んだ現代思想 (講談社 サル

あるといえよう。

同叢書の第一巻には新編・

旧

編双方の

建 国百周年にあたることもあり、 きであろう。 この数年間、 五四運動九十周年、

ない。 れた『原典中国近代思想史』を事実上根柢から一 げた様々な通史も上梓されたが、ここでは一々取 会、二○○九年)である。その他、 年の旧作に最近の研究を増補した横山宏章『陳独秀 た論著も多く出版された。その代表的なものが一九八三 集を行っており、そこに新たな視点による可能性をみる。 ではなく、大清の統治体制の崩壊の方に重点を置 年)等多数にのぼるが、特に最後のものは辛亥革命自体 国家」へ―― のだけでも王柯編 ムや論集が多く出された。 (早稲田出版、二〇一一年)、 〇~二〇一一年) 一年)、日台関係研究会編『辛亥革命一〇〇年と日本』 個々の思想家や、表徴からこの時代を再考しようとし ――「個性の解放」をめざして』(慶應義塾大学出 しかしながら、その中でもかつて七十年代に出さ 典中国近代思想史』全七巻 清朝崩壊一〇〇年』(勉誠出版、二〇一一 『辛亥革命と日本』 が編纂・出版されたことは画期的で 国内で出版された寓目したも 楊海英編 内外で紀念シンポジウ 辛亥革命 「近現代」を取 (藤原書店、 (岩波書店、 『王朝から 中 -華民国 り上げ いた編 り上 の時 国民

代

の変革論の広がり」として考察する立場を表明し、 の総体的な変容と再生の過程」「近代受容をめぐる各種 ているのに対し、新編では「人類社会が生んだ固有文明 放し、歴史の主人公となっていった」過程としてとらえ あった人民が、外と内との敵の支配を打倒して自己を解 であるが、旧編が近代を「これまで圧迫・搾取の対象で 総序」が載せられておりその特色を比較するのに便利

きないものがあることを感じざるを得ない。 かしながら、新編「総序」中の次の一節には看過で

かにも映る。(第一巻 八―九頁)

ストの選択や配列にも工夫をこらしている。

ざしが大きく変わるとともに、そうしたまなざしを 抱きつつも、経済的・軍事的な中国の「大国」化に 生む日中関係の基盤そのものが、 疲れといった指摘すらなされている。 や戦争責任という重い問題をめぐっては、 は不安を覚え、一部には過度に感情的 国」になった中国に対して、国民は総体的に好感を 「反中」の議論が強まりつつある。 て特に指摘しておきたいのは、巷間にあふれる各 本では、 てい 「革命の るの である。 Ī から一 〈中略〉 転 いまや構造的 また、歴史認識 /日本の側につ して「ふつうの 中国へのまな な「嫌中」 「謝罪 な変

> 種中 関係が緊密の度を増した現在、 洋戦争に対しては、合意形成のための基盤を、 的合意を形成し得た戦後日本が、先のアジア・太平 を得ない。非核や平和主義について、安定した国民 純明快な中国論との大きな落差にも、 とマス・メディアやインターネットで喧伝される単 究者の間で吟味されつつ緩やかに共有される中国 しているのではないかという危惧である。また、 -国論 の量的増大が、かえって質的後退をもたら かえって弱めている 驚かされざる

に対して専門家がどのように対処していくかという意志 よるのであることを考えると、「緩やかに共通され らかは実際には「専門家」とみなされている人々の手に が弱いように感じられる。まして、その手のもののいく ようなものの氾濫を許してしまったかという自覚やそれ ないかという指摘には肯首せざるを得ないが、 をふりまくような本が「質的後退」を促しているのでは かに最近、頓に目に付くようになったあらたな中国幻想 国民的合意を形成 [像]なるものの存在自体が疑問視されても仕方がない 11 つ戦後日本が し得た」のかはここでは問うまい。 「非核や平和主義について、 安定した 何故その る中

玉

といえよう。

は象徴的である。 は象徴的である。

国理解により寄与できるものは近現代の思想家や学人の

そのような研究書等の翻訳も重要ではあるが、真の中

二六号、二〇一〇~二〇一一年)がある。今後とも、こ だものとして、溝口雄三氏の遺著 として、またこれからの研究者に対する問いかけを含ん の方面で多くの翻訳・紹介がなされることを期待したい て著述」(小野恭教訳、『中国――社会と文化』第二五― 第三部として陳独秀 たが、この方面での最近の成果としては、前掲横山書に 専門家のみならず江湖に広く受け入れられたことがあっ 顧頡剛・楊寛ら近代の思想史家らの回 伝記・自叙伝の翻訳・紹介であろう。かつて胡適を初め 一九八三年)他、湯志鈞氏の回顧録「家計、 最後になったが、本篇で扱った時期全般に通ずるもの 「実庵自伝」が収められた(初出は 『中国思想のエッセン [顧録が翻訳され 、研究、

季 しておく。 儒 ス』(岩波書店、二○一一年)が出版されたことを附記↓ たんかん でんして 溝口雄三氏の遺著『中国思想のエッセン